自己同一性に着目した山村集落の持続可能性に関する研究
―宮城県刈田郡七ヶ宿町の二つの集落の比較を通して―

A study on sustainability of village in view of its self-identity :
A comparison of two villages in Shichikasyuku Town,Miyagi Prefecture

渋谷　俊（環境経済学分野）

【目的】

人口の半数を 65 歳以上の人が占める集落は限界集落と呼ばれ，将来消滅する可能性のある集落として大きな社会問題になっている．また，地域づくりにおいても定住促進事業にみられるように，人口の維持や高齢化率の低下を重視しすぎる嫌いがある．しかし，人口や高齢化率といった指標は統計上からみた集落の一側面を表しているにすぎず，集落の方向性を捉えきれていない．そこで本研究では，集落の文化伝承や住民の意識に着目したミクロ的な視点，集落の自己同一性に基づいて，持続可能性の観点から集落を評価する新たな枠組みを提案し，その妥当性について検討する．

【方法】

研究を進める流れとして，まず既存の限界集落や農村の持続可能性についての研究を整理し，本研究の位置付けを明確にする．次に，本研究独自の視点である生命体として集落を捉えたときの持続可能性について言及し，そこから導き出される自己同一性という概念を用い，集落の自己同一性確立について考察する．そして，自己同一性確立の契機とされる歴史的連続性と他集落との関係という二つの概念から集落の自己同一性を評価する指標を作り，それを元に調査票を作成する．調査は宮城県で最も高齢化が進む七ヶ宿町の二つの集落を比較する形でおこない，高齢化率と集落の自己同一性の関係性を明らかにする目的で行う．

【分析結果】

比較調査から，集落の自己同一性確立の契機のうち歴史的連続性に関しては，二つの集落のうち高齢化率や人口減少率が高い集落の方が比較的高いという結果が得られた．しかし，もう一つの確立の契機である他集落との関係については二つの集落とも住民たちに集落を差別化する意識はみられず，両集落のあいだに差はなかった．調査段階では，両集落とも集落の自己同一性が確立されているとはいえないものの，高齢化率の高い集落の方が今後集落の自己同一性を確立させる可能性を残していることがわかり，高齢化率が集落の自己同一性確立に影響を与えないことが明らかになった．

【結論】

本研究では，集落をみる新たな視点として集落の自己同一性を挙げ，その方法論的枠組みを示した．そして比較調査を行った結果，本研究の枠組みからみた集落の持続可能性は高齢化や人口減少の進んでいる集落の方が高い可能性が示された．逆に人口を維持し，高齢化率も比較的高くない集落でも持続可能性があるとはいえない状況にあることも明らかになった．集落の自己同一性という枠組みを今後精査する必要はあるものの，従来の高齢化率や人口だけでは集落の持続可能性を測る指標としては不十分であるということが示唆された．今後の地域づくりにおいても，定住促進や観光地化ばかりに偏るのではなく，本研究の集落の自己同一性という枠組みから検討することも有意義であると考えられる．